

## 名古屋城復元 差別発言が映す不合理



写真は名古屋にいたころに撮った名古屋城。市役所に近く、よく散策したものだ。この名古屋城復元をめぐる揺れ動いている。

6月8日放送メーテレ「アップ!」録画を視聴した。市民討論会での「差別発言」が生々しく伝えられていた。とりわけ腹が立ったのは、「ご自由に言ってもらうのが前提ですからね。広い気持ちで考えるのが普通。言論の自由は」という河村市長の発言だ。

ここでは、朝日新聞7日の表題社説を紹介したい。一市が主催する集会で差別発言が飛び出したら、とっさに注意する。差別を許さない姿勢をみせることも公人の役割だろう。名古屋市の河村たかし市長らは、それができなかった。市が3日、名古屋城天守の木造復元をめぐる開いた市民討論会でのことだ。車いすの男性が最上階の5階までのエレベーター設置を求めたら、別の発言者が「お前が我慢せえよ」と発言。さらに別の男性は、身体的ハンディキャップへの差別表現を使ったうえで「エレベーターは誰がメンテナンスするの。その税金はもったいない」と言った。会場から拍手までであった。許されることではない。司会者や市職員が直ちに発言を止めるか、注意すべきだったが、そのまま次の発言に移った。

河村市長は集会後、記者団に「よう聞こえなかった」と言った。市は動画配信を止め、市長も2日後、差別発言については制止すべきだったと謝罪したが、その他については判断を避け、責任はあいまいなままだ。率先して差別を無くす行動をすべき公人の責務を分かっているのか、疑いたくなる。集会のテーマは、バリアフリーだった。う社会の根底にある差別意識が噴出する恐れは十分あった。対処方法は事前に考えておくべきだっただろう。今回の事態を招いた遠因は、長年の市の姿勢にあるのではないか。バリアフリー化の議論は何年も続く。障害者団体が再三対応を求め、日弁連も昨年、現在の復元した城と同様、エレベーター設置を求めたが、市は「史実に忠実な復元」にこだわり、受け入れない。代替の小型昇降機も石垣内の地階から1階までしかつけない方向だ。障害者への配慮は重視しなくてもいき、と言わんばかりだ。それが、差別発言や拍手も許されるといった認識につながっていなかったか。集会の場にいあわせた市長自身、静かに謙虚に省みるべきだ。

1945年の空襲で焼失した元の名古屋城は、国宝に指定されていた。それを現代の技術で復元する。郷土の誇りを取り戻そうというロマンはわかる。だからこそ、ここでいったん立ち止まり、みんなが喜べる復元を目指してもらいたい。誰もがくるま椅子を使うようになる可能性はあるし、高齢化が進めばなおさらだ。最近の市民アンケートによると、回答の半数が、最上階までの小型昇降機設置案を支持していた。完全な復元は不可能であり、様々な現代的要請のうち、バリアフリーだけ無視するのは不合理だろう。文化庁に申請する最終段階だ。障害者を排除する計画であってはならない。

(2023年6月13日)